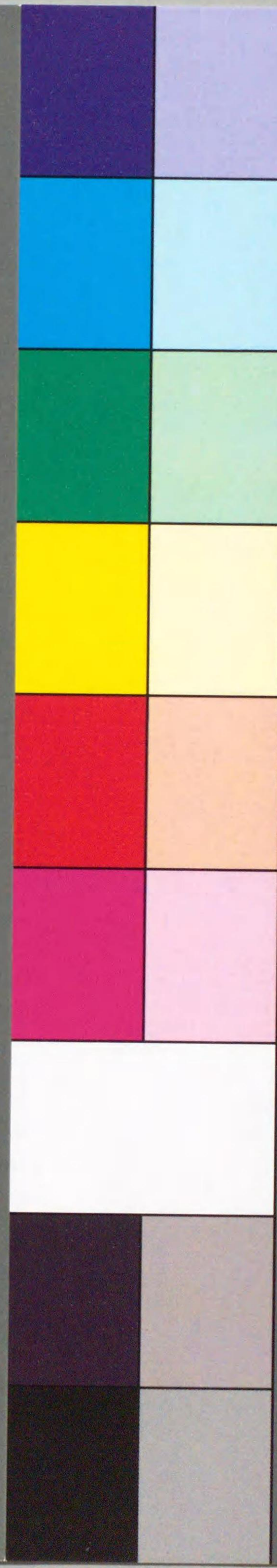


Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

家庭童話

黄金の鳥

第十編

東京學海指針社發行



家庭童話のき

古來久しく等閑に附せられたりし少年文學も、明治聖代の餘澤を蒙るに至り、漸く人の着目する所となり、昔話、お伽噺の類一度世にもはやされてより、兒童教育に關する此類の書籍々として出版流布せられ、今や殆どその盛を極めんとす。

然れども、試に此類の書を繕くに、多くは單に興味ある談物たらんを目的とし、その内容は訓練上如何なる價值あるかを問はざるもの多きが如し。されば智識啓蒙に至りてはその功多からんも、而かも品性陶冶の事に至りては尙かつ幾多の注文を要するに似たり。

思ふに少年時代において、智識啓蒙の如何を問はんより、寧ろ訓練上の効果如何と顧るの急務ならんことを信ず。殊に目下日露開戦の時機に際し、人心多少殺伐の氣象に流れんとする傾あるは勢止むべからずと雖も、兒童の心をしてこれに奔馳せしむるは教育の本旨にあらずして、また忽にすべからざること信ず。因て本會は廣く資料を古今内外に求め、最も兒童の品性陶冶に適切なるものを集めて、以て此編を成せる所以なり。世の父兄ならびに教師たるもの、冀くは此意を諒せられんことを。

教育資料研究會



I 種
W



1200700630720

鳥の金黃

家庭童話第十編目次

一	長男の番	二	長男の族	三	次男の番	四	三男の番	五	狐のお供	六	黄金の鳥	七	赤鬼	八	青鬼	九	黄金の釜	一〇	狐の智恵	一一	兄さんの悪計	一二	果し合ひ	一三	不思議な樽	一四	奇體な事	一五	代代の寶
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇

家庭童話第十編 黄金の鳥

一 長男の番

ばんすゐ

昔、ある所に、黄金の實なる、林檎の木をもった、王様が住んで居りました。處が、いつも其の實が、もう明日で實があるといふ前の晩になると、誰れか盗るのか何うしたのか、奇體に、其の實が、消えてなくなりました。ある日、王様は、三人の王子を呼んで、

「若しお前達の中で、あの林檎の熟したのを、取ってくれるか。それとも、其の盗人を、捕へて来てくれた者には、此の

(1)

(2)

國を、讓ッてやらう。』
と、言ひ渡しました。
そこで、長男の王子が、
まづ初めの年に、盗人の
來るのを、今か今か
と待ちながら、其の木
の下に、坐ッて居りま
した、すると、丁度夜
半頃に、黄金色に光ッ
た、一羽の鳥が、舞ひ
下ッて來ました。王子
は、それを見て、非常



に驚いて、林檎の番ど
ころか、大急ぎで、御
殿の中へ、驅け込んで
しまひました。

二 長男の旅

翌朝になッて見ると、
例年の通り、林檎の實
は、一つ残らず、あり
ませんでしたから、其
の王子は、非常に悔し
がッて、是非とも、其

(3)

の鳥を、搜し出して、
此の國の王様にならう
といふ考で、王様から、
澤山のお金を、いただ
いて、いよいよ、御殿
を出發いたしました。
行くと程なく、大分お
腹がすいて、來ましたの
で、路傍へ坐ッて、お
辨當を食べよとする
と、そこへ、一匹の狐
が、ヤッて參りまして、



こりや
たいへんだ

狐『何うか、私にも一つ、
惠んで下さい。』
と、言ひますと、王子
は、急にいやな顔をし
て、
王『お前にや、此の棒で
澤山だ。私は、これ
から、長い間旅をし
なけりやならないの
だから、お辨當はや
れないよ。』

狐は、王子の顔を、の

(4)

ぞき込みながら、狐『ははあ、そんなお考ですか。』

と、言ひながら、森の方へ、行ッてしまひました。王子は、お辨當を食べてから、又も歩き出して、ヤツと、ある大きな都に着いて、一軒の宿屋に泊りました。所が、この宿屋には、舞踏やら樂隊やら、



面白い事が、澤山にありましたので、王子もそれに浮かされて、黄金の鳥の事や、お父さんの事や、國の事までを、残らず忘れてしまッて、一切夢中で、こへ滞留してしまひました。

三 次男の番

其の翌年、二番目の王

(5)

子が、番をする事になッて、例の樹の下に、坐ッて居りますと、又も夜半頃になッて、羽の黄金の鳥が、太陽の様に光りながら、舞ひ下ッて來たのを見まして、兄さん同様、御殿の中へ、逃げ込んでしまひました。翌朝になッて見ると、林檎の實は、ちゃんと無くな



ッて居りましたので、此の王子も、其の鳥を探しにと出かけました。程なく、お腹がすいて來たので、路傍に坐ッて、お辨當を、食べようとすると、又も、何處からとなく、一匹の狐が現れて、狐『何うか、私にも一つ、恵んで下さい。』と、言ひますと、王子

(6)

は、直と、傍にあつた土の塊を拾つて、王「お前にや、これで澤山だ。私の辨當がやれるもんか。お前は、私が、これから先、何んなに遠い所へ、何んなに長い間、旅をしなけりやならないか、知ッてるかい。」狐は、それを聞いて、暫時の間、凝然と、王



子の顔を、見て居りましたが、狐「ははあ、そんな御心がけてすか。」と、言ひながら、森の方へ、行ッてしまひました。王子は、そんな事には、少しも、氣を止めないで、お辨當を食べてから、再び、歩き出しますと、やがて、兄さんが來た所と、同

(7)

じ都の同じ宿屋の前に來ました。折から、兄さんに逢ひましたので、此の王子も、ここへ宿る事になりました。所で、兄の王子は、あまり食べたり遊んだりばかりして居りましたので、折角のお金も、すっかり遣ひきッて、大層困ッて居た所でしたから、弟が一緒になつた



のを幸ひに、再び其のお金を遣ッて、食べた遊んだり、大騒ぎを始めました。二番目の王子も、あまりの面白さに、鳥の事や、お父さんの事や、國の事までを、すっかり、忘れてしまッて、兄さんと一緒に、其の宿屋へ、逗留してしまひました。

四 三男の番

さて又、年が明けて、例の林檎が、熟する時に、なりましたので、今度は、末の王子が、其の番をする事となりました。案の通り、夜半頃になると、俄に、太陽の様な光をさせて、一羽の黄金の鳥が、舞ひ下ったかと思ふと、



いきなり、其の林檎の實に、飛び付きました。王子は、先程から、其の様子を、見て居りましたが、今こそと思ひましたが、不意に飛びかかって、つかまへようとしましたが、あやにく、其の尾の羽毛を、一本だけ、抜き取ったばかりで、逃げられてしまひました。王

子は、直と、其の羽毛を持つて、王様のお室へ入りますと、眞暗な所までが、丁度、晝間の様に、輝きわたりました。そこで、王子は、兄さん達の音便を、さぐりかたがた、是非とも、其の鳥を、捕へようと、決心しましたが、王様は、なかなか、ゆるしませんでした。何



故かといふと、總て、兄さんの方が、弟よりも、智慧がある筈なのに、其の兄さんでさえも、捜せないものが、何うして、其の弟に、捜せるものか。其の上此の王子までを、無くしてしまつては、大變だと考へたからでした。けれども、王子が、あまり幾度も、願つたの

で、王様も、とーとー、それを許しました。

五 狐のお供

末の王子は、いよいよ、出かけてから、やはり路傍へ坐ッて、お辨當をひろげると、又も、例の狐が、ヤッて來ました。

狐『何うか、私にも一つ、惠んで下さい。』

わたしは
あとから
まわり
ませう



王子は、にこにこしながら、

王『私は、これから先、きツと、澤山のお辨當がいるに違ひない。だがまあ、一つ上げよう。』

と、言ッて、一つの大きなお握飯をやりました。狐は、それを食ベ終ッてから、

狐『全体、あなたは、何

處へおいでですか。』と、聞きましたから、王子は、これまでの事を、委しく話しますと、狐『若しあなたが、私のいふ事をおききななら、私は、今の御恩返しに、あなたをお助けしませう。』王子は、それを承知して、一緒になッて、そこを出發しました。



なく、兄さん達の入ッた、都の入口に來ますと、連れの狐は、

狐『此所には、澤山犬が居て、私の邪魔をしますから、私は、後から、何とか工夫をして、参りませう。』

と、言ッて、兄さん達の、今までした事や、今して居る事を、知らせるから、

狐「若しあなたまでが、
 其の宿屋へ、お泊り
 になると、もう決し
 て、あなたのお願ひ
 事は、適ひませんよ。
 お分りですか。」
 と、諫めてくれたのを
 聞いて、王子は、必ず、
 そこへは泊るまい、と
 いふ事を、堅く誓ッて
 から、一先、その狐に
 分れました。だが王子

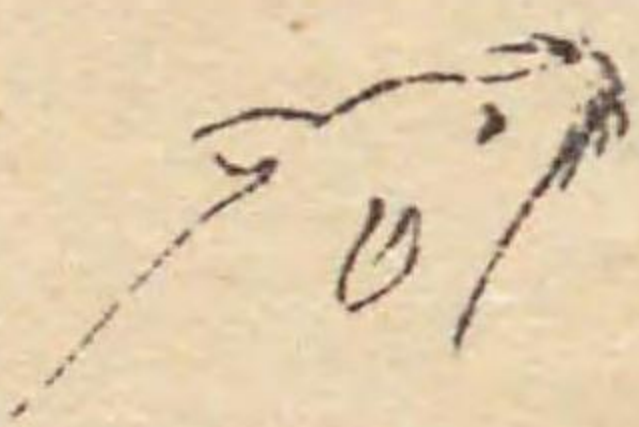


が、其の宿屋の前に來
 た時に、樂隊の響や、
 人の騒ぎが、大層、面
 白さうに、聞えました
 ので、何しても、其の
 儘で、通り過す事が、
 出来なくなりましたか
 ら、まあ、一寸位は、
 好からうといふ考で
 室の中を覗くと、それ
 と同時に、狐の事や、
 鳥の事や、お父さんの

事や、國の事などを、
 すっかり、忘れてしま
 ひました。

六 黄金の鳥

さて、例の狐は、王子
 から、大丈夫だ、とい
 ふ言葉を、聞いたもの
 の、何うも安心が、出
 来ませんかだったので、
 やつと、工夫をして、
 宿屋の前に、来て見る



と、王子が、夢中にな
 ッて、其の騒ぎに、見
 とれて居りましたから、
 狐は、びっくりして、
 頻と、戸の隙間から、
 めくばせをして居りま
 すと、王子は、それを
 見付けて、やつと、我
 れに返ッて、再び、そ
 こを出かけました。暫
 時の間、必死になッて、
 歩いて行くと、狐は、

遙か向うに、見え出した、高い山を、指さして、

狐「御覽なさい、向うに、高い山が見えるでせう。あの後に、黄金の葉の木が、生えて居て、其の木の枝に、あなたが、其の羽毛を取った、黄金の鳥が、巢を食って居ります。」



王子は、大變に、喜んで、飛ぶ様にして、駆け付けて見ると、果して、狐が、言ッた通り、の木が、生えて居て、それに、黄金の鳥が、巢を作ッて居りました。見るから、王子は、其の枝目がけて、走り寄らうとすると、狐は、王子に、一本の羽毛を渡して、

狐「あなたが、其の巢の下へ行ッたら、此の羽毛を、お振りなさい。さうすると、其の鳥が、これを見て、あなたの手へ止りますから、その所をつかまへておいてなさい。だが決して、一寸でも、其の木へお觸りになッてはいけませんよ。其の木



の下には、恐しい鬼が居て、一寸でも、其の木へ、觸る者があると、立ち所に、其の者を、食ひ殺してしまふ、といふ話ですから、きッとして、言ふのを聞いて、王子は、王「何に、其の心配には及ばないよ。私は、

決して、其の木には、
觸らないから。』
と、言ひながら、其の
枝の下へ、驅けて行き
ました。

七 赤鬼

そこで、王子は、狐か
ら、聞いた通りに、其
の巢の下に来て、手に
持った羽毛を振りま
すと、直と、黄金の鳥は、



王子の手に、飛び移り
ました。王子は、其の
儘、歸ってしまへば、
何んの事も無くって、
済んでしまったのでし
たらうが、そこが、人
の弱みといふもので、
王子は、あまり、其の
葉の美しいので、うッ
かり、其のうちの極小
い葉に、一寸、指を觸
った所が、さあ、驚く

まい事か、見る間に、
其所へ、一匹の赤鬼が
現れて、兩方の眼から
は、雷光の様な火花を
出しながら、雷の様な
聲で、
鬼「何者だ、おれの鳥を
盗んだのは、さあ、
見る、今食ひ殺して
やるから。』
と、どなりました。王
子は、いろいろと、言



みらいま
くひころして
やるから

ひ譯をしましたが、何
うしても、承知しませ
んでしたから、今度は、
頻とあやまると、赤鬼
は、かはいさうと思ッ
たかして、
鬼「好し、若しお前が、
隣の奴が盗んで行ッ
た、おれの馬を取り
返してくれたら、生
命だけは、助けてや
らう。』

と、言ひましたから、

王子は、喜んで、

王^わだが、全体、そりヤ

何處^{どこ}にゐるんだい。』

鬼^{おに}うむ、そいつか。そ

れは、向^{むか}ふに、青^{あお}い

山^{やま}が見^みえるだらう。

あ^あの山^{やま}の^{うしろ}後^{のち}に居^ゐるん

だ。』

王子^{わじ}は、必^{かなら}ず、取^とり返^{かへ}

して来^こよう、といふ事^{こと}

を、確^{たしか}に、約^{やく}束^{そく}して、



きれいな
くつわが
あるな

や^やつと、生^{いのち}命^{めい}だけ^{だけ}を助^{たす}

か^かつて、狐^{きつね}の^{ところ}處^ちへ、歸^{かへ}

つて来^こると、狐^{きつね}は、そ

れを聞^きいて、あ^あまり好^よ

い顔^{かほ}は、し^しま^ませ^せん^んで^でし

た。

狐^{きつね}『あ^あな^なた^たは、實^{じつ}に、ま

づい事^{こと}を、し^して^て下^{くだ}さ

いましたね。私^{わたし}の言^い

つた通^{とほ}り、し^して^て下^{くだ}さ

れば、今^{いま}頃^{ごろ}は、も^もう、

と^とつ^つく^くに、歸^{かへ}る事^{こと}が、

出^で来^きま^ました^たの^のに。』

二^{ふた}人^{たり}は、已^やむ^むな^なく、ま

たも、此^こ所^こを、出^{しゅつ}發^{ぱつ}い

た^たし^しま^ました。

八 青鬼

や^やつと^との事^{こと}で、其^そ所^こへ

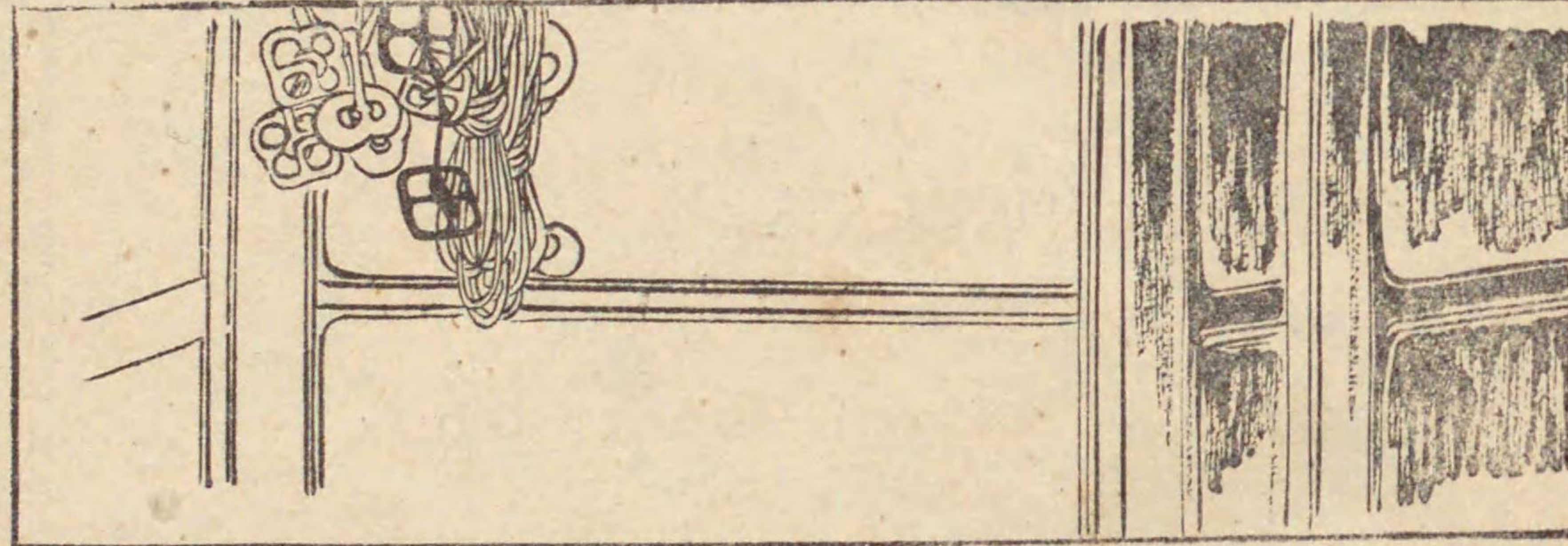
着^つき^きま^ました^たの^ので、王^わ子^じ

は、直^{すく}と、其^その^の馬^{うま}を、

取^とり^りに^に行^いか^かう^うと^とす^する^ると、

狐^{きつね}は、

狐^{きつね}『お^お待^{まち}ち^ちな^なさ^さい。あ^あな



た^たが、其^その^の厩^{うまや}に^に入^いる

と、そ^そこ^こに、金^{きん}や銀^{ぎん}

で出^で来^きた^た轡^{くつわ}が、澤^{たく}山^{ざん}

に、か^かか^かつ^つて^てあ^あり^りま

せ^せう^うが、決^{けつ}して、そ

れ^れに^に手^てを^を觸^ふれ^れて^ては、

い^いけ^けま^ませ^せん^んよ。一^{いち}寸^{すん}

度^ども、さ^さは^はる^ると、今^{こん}

度^どは、青^{あお}鬼^{おに}が^が出^でて、

あ^あな^なた^たを^をつ^つか^かま^まへ^へる

で^でせ^せう^うか^から、あ^あな^なた

は、其^その^の内^{うち}か^から、鐵^{てつ}

て出来た、轡をはめて、其の馬を、連れておいでなさい。』

と、言ひましたから、王子は、又も、堅く約束をして、其の厩へ入りましたが、何うしたのか、其の立派な轡を見たと同時に、俄に気が變つて、いくら狐が言つたからつて、まさか、こんな所へ、青



鬼が出る筈はあるまい。何うせ取るなら、一番立派なやつを取つてやれ、といふ考で、そつと、手をのばして、黄金の轡に、指をかけた所が、何うでせう、忽ち、其所へ、一匹の青鬼が現れて、口からは、青い火を、吹きだしながら、雷の様な聲で、鬼誰れだ、おれの馬を

盗むのは。』

王子は、驚いて、飛びさがりました。おッ付きません。見る間に、青鬼は、王子の衿頸を捕へて、食ひ殺さうとしましたから、王子は、王『おい、一寸待つてくれ。何うしても、私を助けてくれる事は、出来なにか。』と、言ひますと、青鬼



は、一寸考へて居たが、鬼何に、助けなくてもない。其の代り、隣の奴が、おれの所から、盗んで行つた、黄金の釜を取り返してくれ。』王子は、喜んで、王『だが、全体、そりや何處にあるんだい。』鬼『うむ、そいつか。向うに見える禿山の後

だ。』
 王子は、必ず、それを
 取り返してやらうと約
 束して、狐の所へ、歸
 ッて來ると、狐は、大
 層な不機嫌でした。そ
 れもその筈でせう、折
 角諫めた事を、王子は、
 一つとして用ひなかつ
 たのですから、何んな
 人でも、腹を立てずに
 は居られませんまい。



狐『又あなたは、しくじ
 りましたね。私の言
 ふ事さへ、お用ひに
 なれば、今頃は、ま
 う歸れましたものを。
 私は、もう、かうな
 ッちヤ、むだですか
 ら、御一緒に行くの
 はよしませう。』
 と、言ひながら、狐の
 歸りかけたのを見て、
 王子は、大變に後悔し

て、
 王『これからは、決して
 決して、お前の言ふ
 事は、背くまいから、
 何うか、元通り、一
 緒の仲間になッてく
 れ。』
 と、頻に、頼みました
 ので、狐も、もともと、
 何處までも、王子を助
 けよう、といふ考であ
 りましたから、再び、



一ッ緒になッて、其所を
 出發しました。

九 黄金の釜

いよいよ、其の黄金の
 釜のある所へ來ますと、
 狐は、王子が、取りに
 行かうとしたのを、お
 しとどめて、
 狐『これまでは、皆、あ
 なたがおいででした
 が、今度は、私が、

取ッて来て上げませうから、あなたは、此所で、お待ちなさい。』

と、言ひながら、行ッてしまひましたが、少時たつと、一つの黄金の釜をくはへて、歸ッて来ました。そこで、王子は、大層に、喜んで、直と、それを、青鬼の處へ、持ッて行ッ



て、生命を許してもらひ、青鬼の居なくなつたのを見て、今度は、狐から聞いた通りにして、其の馬を、取り返してから、赤鬼の所へ、連れ歸ッて、又も、生命を許してもらひ、今度も、赤鬼の居なくなつたのを見て、うまく黄金の鳥を、つかまへた所で、大急ぎで、逃

げ出しました。

一〇 狐の智慧

やがて、廣い麥畠へ來ると、狐は、急に、立ち止ッて、

狐『何うも、變な音が、聞えます。私は、此所で、様子を見ますから、あなたは、一足先へ、お出かけなやう。』



と、言ひながら、急いで、傍にあつた麥稈で、着物を作ッて、丁度、人の姿をして、立ッて居りますと、間もなく、一匹の鬼が、飛ぶ様に、驅け付けて来ました。鬼『おいおい。お前は、今此所で、黄金の鳥を、盗んで行く奴を見付けなかつたか。』狐は、何うかして、追

ひ返してやらう、と思ひましたから、わざととぼけた顔をして、狐へえ、今通ったって、馬鹿をお言ひでないよ。私は、さっきから、此所で、仕事をして居たが、そんな者は、一人だって、通りやしない。』
 鬼「何あに、そんな筈はない。確かに、通った



はかを
おひでないよ

に違ひない。』
 狐「はあ、分った、私は、祖母さんの祖母さんから、聞いたツけ、黄金の鳥を抱へた人が、此所を、通った事があるツて、その事じゃないか。そりやもう古い事さ。其の祖母さんが、此所で、麴包屋をして居た頃だもの。』

赤鬼は、それを聞くと、急に、笑ひ出して、鬼「はッはッはあ、そんなに、おれは寐たかな。それじゃだめだ。どれ又、家へ歸って寐よう。』
 と、言ひながら、元来た方へ、歸ッてしまひました。

一一 兄さんの悪計



そこで、狐は、王子に追ひ付いて、一緒に、歩き出すと、程なく、例の都に、着ました。狐は、
 狐「此所には、犬が居ますから、お供が出来ません。私は、此所から、回り道をしませから、あなたは、真直に、おいでなさい。兄さん達に見付

かると、大變ですよ。決して、宿屋へ寄つてはいけません。』と、言ッて、分れましたが、王子は、都へ入ると同時に、何んとなく、兄さん達に逢ッて、一言、話して見たくなり、忘れてしまッて、其の宿屋の前に来ると、

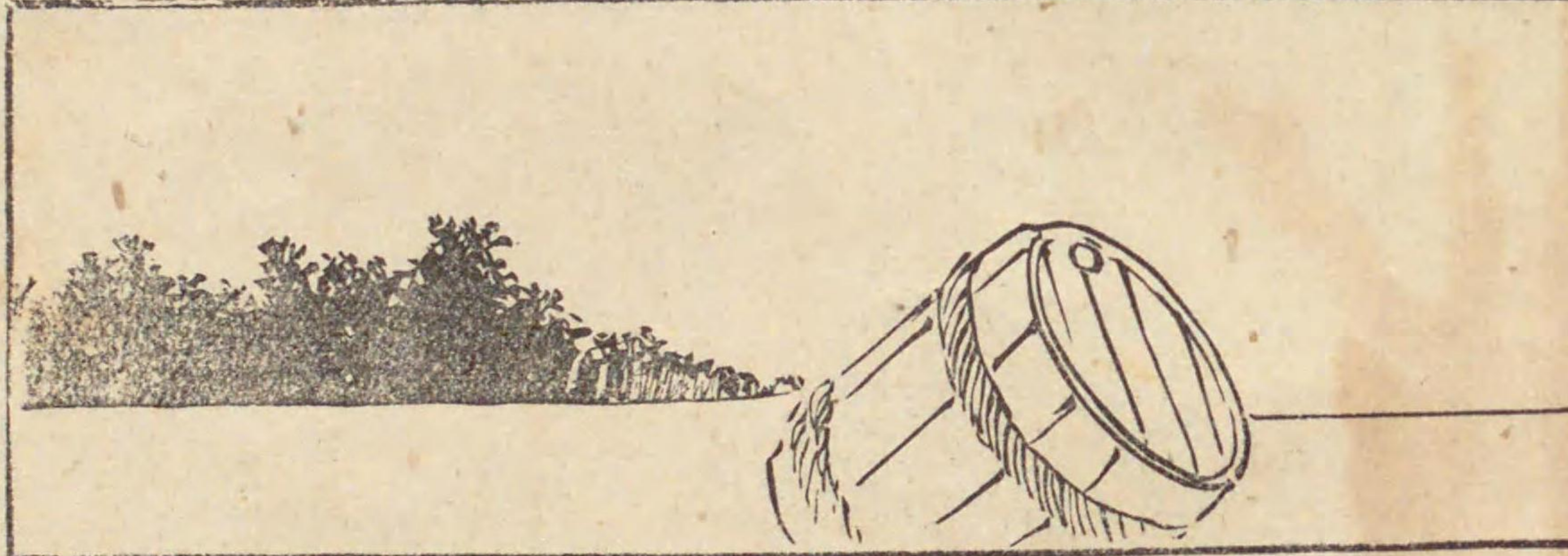


思はず、立ち止ッてしまひました。折から、窓の所に居ッた兄さん達は、今しも、黄金の鳥を抱へながら、歸ッて来た、弟の姿を見て、急に、悪い心を起して、いきなり、弟をつかまへて、嚴重な樽の中に、閉ぢ込めて、それを、近所にあつた、大きな湖水の中に、投げこん

てしまひました。

一二 果し合ひ

そこで、二人は、首尾よく、黄金の鳥を、横取りしたのを喜びながら、王様の御殿に歸りました。かくと知ッて、王様の喜びは、一方ではありません。王『これで私も、ヤッと安心した。どれお見



せ黄金の鳥を。』二人は、急いで、其の鳥を、箱の中から、出して見ました所が、こはそも如何に、確かに、さっきまでは、黄金色に、光ッて居た羽毛が、今見ると、黄金どころか、銀の光澤さへもない、きたない色の鳥になッて居りましたので、二人の驚きは、言ふま

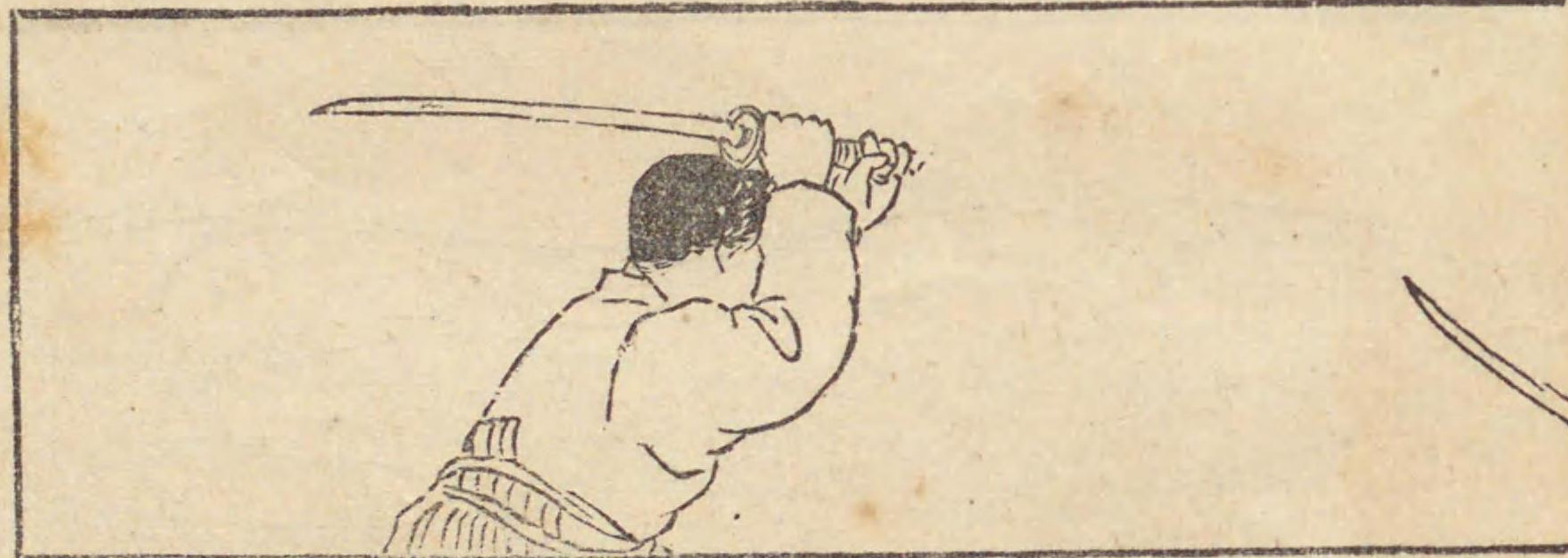
でもなく、王様までが、
 非常な落膽でありまし
 た。さて、根情の曲ッ
 た人の心がけといふも
 のは、眞に、あさまし
 いもので、此の二人の
 王子達は、美しい黄金
 の鳥が、こんなきたな
 い色になつたのは、自
 分達が、悪い事をした
 からだとは思はないで、
 てんでんに、何んでも



これは、黄金の鳥を盗
 んで、こんな鳥を、代
 りに置いたものがある
 に違ひない。と考へま
 したので、長男の王子
 は、次男の王子を疑ひ、
 次男の王子は、長男の
 王子を怪しんで、終ひ
 の果が、とーとー、眞
 劍の果し合ひになつて、
 二人とも、死んでしま
 ひました。

一三 不思議な樽

ここに、狐は、約束の
 所へ来て、王子の来る
 のを、今か今かと、待
 ッて居りましたが、一
 向に、音沙汰がありま
 せんのを、變に思ッて、
 此所彼所を、探し歩い
 て居る内に、やがて、
 大きな湖水のところ
 まゐりました。水は、水



晶の様に、すき透ッて、
 底に泳いで居る魚は、
 一つ一つ數へる事も出
 来るし、湖水の周圍に
 は、青青して居る森が、
 こんもりと、生ひ茂ッ
 て、如何にも、好い景
 色でありましたので、
 流石の狐も、暫時の間、
 唯茫然として、眺めて
 居ると、湖水の眞中に、
 ひよッと、眼に止ッた

物がありませんでしたので、はてな、と思つて、能く見ると、一つの不思議な樽が、ふはふはと、浮いたり、沈んだりして、居るのでありますから、

狐「おいおい、樽さん。

何故お前は、そんな所に浮いてるのかい。』と、聞きますと、奇妙な事には、其の樽の中



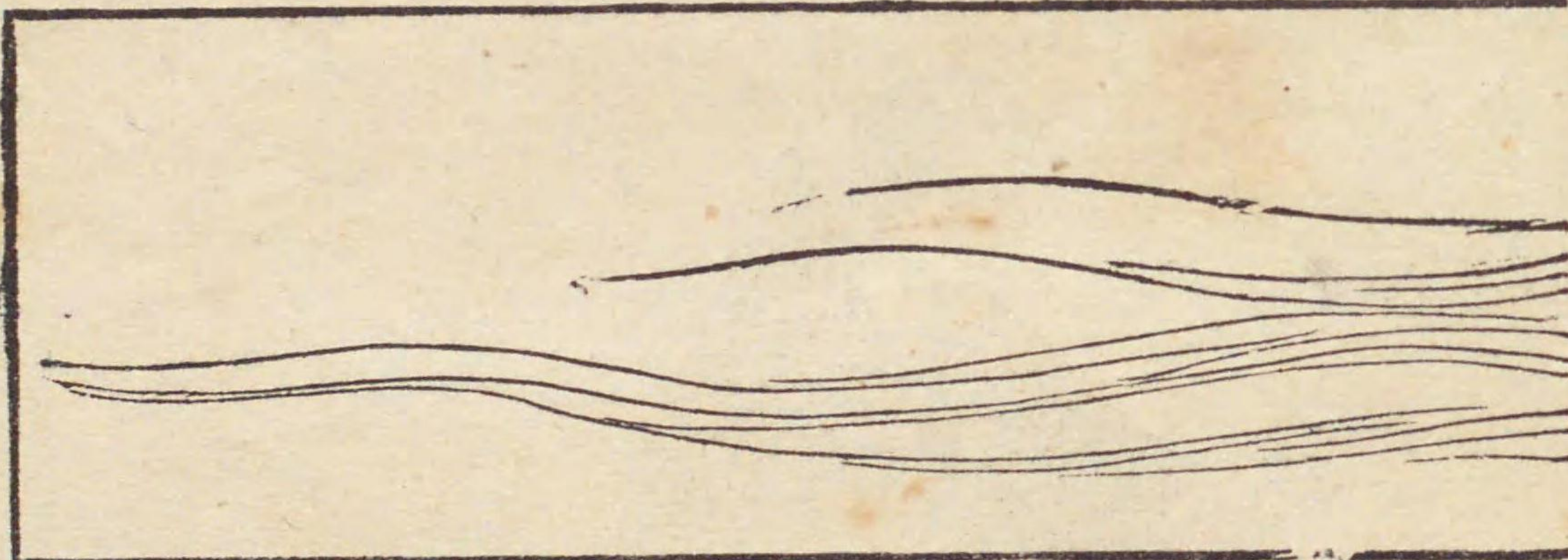
から、人聲がしました。樽「おい狐さん。私だよ。』狐は、確にそれが、王子の聲だと知りましたから、いきなり、湖水の中に飛び込んで、やつの事で、其の樽を岸へ押し上げてから、必死になつて、其の蓋を、噛み切りました。狐「さあ、内から、おた

たきなさい。』

やがて、王子は、樽を壊して、立ち上りました。

一四 奇體な事

王子は、又も、危い生命を、狐の爲めに救はれましたので、大層狐を、有りがたく思つて、御殿へ歸つたなら、十分に、お禮をする考で、狐を連れて、歸つてま



りました。所が、奇體な事には、此の王子が、御殿へ入ると同時に、たつた今まで、きたない色に、變つて居た、黄金の鳥が、再び、輝輝と、光り出して、反つて、前の時よりも、美しい程になりました。だが、奇體な事は、こればかりではありませんで、王子は、

王様への御挨拶を済ませてから、御自分のお室へ歸ると、間もなく、そこへ、例の狐が這入ッて來て、
狐「何うか、私の首を斬ッて下さい。
あまり不思議な願ひ事でありましたから、王子は、非常に驚きました、見ると、別段、氣の狂ッた様子もなく、



狐「斬ッてさへ下されば、直と、其の理由も、お分りになりませう。決して、生命には、何んの故障にもなりません。何うぞ、お早く。」
と、いふ事でしたから、王子も、「人の言葉まで使ふ狐であッて見れば、何んぞ、不思議な術を、持ッて居るに相違ない。」

と、思ひましたから、いきなり、腰の劔を、引き抜いて、其の首を、斬り落しました。所が、不思議とも何んとも、忽ち、狐の姿は、消えてなくなり、其の代りに、一人の美しい女の人が現れました。

一五 代代の寶

例の狐は、實は、ある



國の王女でありました、がある時、悪魔の爲めにさらはれて、此のあさましい姿にされたのでありましたが、王子が、其の首を斬ッた爲めに、初めて、其の魔法が破れて、再び、元の姿となる事が出来たのでありました。王様は、一部始終の事柄を聞いて、ますます喜

び、直と、残らずの國を、此の王子に譲り、此の王女を、其の王妃と定め、黄金の林檎と、黄金の鳥とは、此の國代代の寶となりました。めでたしく。

家庭童話 第十編 黄金の鳥 終

童

家庭童話全二十冊目録

第一編	寶の箱
第二編	啞娘の環
第三編	文錢の魔
第四編	黄金の法
第五編	陸船の木
第六編	豆の吹少
第七編	笛の吹少
第八編	不思議の首
第九編	寶の庫
第十編	黄金の鳥
第十一編	黒帆の船
第十二編	山男

教育資料研究会編

家

教育資料研究会編

庭

定價每冊金五錢郵稅金貳錢

話

著者 版權所有

教育資料研究会

株式會社 學海指針社

東京市本區橋本通旅籠町一十一番地

前川一郎

東京市本區弓町一丁目廿六番地

開文舍

東京市本區柳原河岸第二十號地

株式會社 學海指針社

東京市本區橋本通旅籠町一十一番地

著者

發行兼者

代表者社長

印刷所

發兌元

明治三十八年三月一日印
 明治三十八年三月五日發行

自五至二十編附典

校外書類

どらんなさい

みなさんのためになるほんですおかしなさい

高等科	校外讀本	各學年四冊	定郵 價稅 每冊 每冊 金拾 金四 貳錢
	校外修身書	各學年二冊	
	校外日本歷史	各學年二冊	
	校外地理書	各學年二冊	
	校外理科書	各學年二冊	
尋常科	校外讀本	各學年四冊	定郵 價稅 每冊 每冊 金拾 金四 貳錢
	校外修身書	各學年二冊	

近刊	校外算術書	各學年二冊
	校外畫手本	各學年一冊
	校外商業書	各學年二冊
	校外農業書	各學年二冊

森友昇三郎

